

土木に賭けた夢 野中兼山の地域開発事業

建設産業史家
菊岡 俱也

プロローグ

の なかけんざん

野中兼山は江戸時代初期に土佐藩家老として、今日にいう社会資本整備と地域開発を積極的に進め、高知県の国づくりの基礎を築いた人。高知の県史・郷土史・産業史のたぐいには必ず登場し、地元には兼山を祭る神社もある。

まず、兼山の人となりからみてみよう。

兼山は元和元年（1615）に生まれた。

土佐の初代藩主はいわずと知れた山内一豊である。一豊の妻の話は有名で司馬遼太郎も『功名が辻』で一豊とその妻のことを書いた。司馬遼太郎は兼山をどう見ていたか。次のように書いている。

「江戸期、土佐藩は“政治は土佐”などといわれて、他藩から一目おかれていた。この評判の一つには野中兼山の三十年にわたる政治とその実績が、世評に高かったこともあるだろう。兼山以前の土佐は、ひとびとが自然に耕し、自然に漁りする山河であるにすぎなかった。兼山は政治の力でこれを改変した。たとえば大いに農業土木をおこして、新田三千町歩を得た。この新田開発に働いたひとたち千人を郷士にとりたて、長宗我部氏の遺臣たちの感情のガスを、幾分でも抜いた。のちのち土佐郷士が土佐の学問と思想のにない手になっていく基礎も、兼山のこの施政から出発したといえる。兼山施政三十年のあいだにおこした用水工事は、物部川流域で七カ所、仁淀川流域で四カ所、吉野川流域で七カ所、四万十川流域で三カ所、松田川流域で一カ所で、その実行力は驚嘆にあたいする。ほかに兼山は土佐という藩を、

それなりの小国家に仕立てようとしたところがある。」（司馬遼太郎『街道をゆく』27巻「因幡・伯耆のみち、櫛原街道」（朝日新聞社刊）より）。

このあとの文章で司馬遼太郎は兼山が採った藩経済の活性化について触れるのだが、作家は前記の短い文章で兼山の本質を見事についている。

野中兼山というひと

さて山内一豊は遠州（静岡県）掛川五万石の大名として信長と秀吉に仕えたが、秀吉の死後は家康に接近、関ヶ原の役では自分の城を明け渡し、家康から土佐二十万二千六百余石を賜った。

しかし、関ヶ原の戦いで西軍に属して敗北した長宗我部盛親の遺臣のうちとくに一領具足（兵農未分離の長宗我部氏下級家臣）たちの山内氏への抵抗は激しく、浦戸城の明渡しを拒否して抗戦、273名が討死するということもあり、一豊をはじめ初期の藩主は領内の鎮撫に苦勞した。

兼山は藩祖一豊の妹の孫にあたる。

兼山が仕えたのは二代藩主忠義（一豊の弟の子）で、忠義の信任を受け、17歳のときに執政を任されたというから並の器ではない。以後、寛文3年（1663）に失脚し、49歳で亡くなるまで、約30年間にわたり藩政を掌握して土佐藩の基礎を築いた。

兼山は海南朱子学（南学）の教えに従い、自身に対しても厳しい日々を強いた。

起床は4時。8時には公務を執り、夕方の6時から10時まで私用や読書に当て、12時に床に就く。兼山の口ぐせは「たとえ百歳まで生きたとしても後世



高知県本山町・帰全山公園に建てられている野中兼山の銅像。
(写真提供：(財)高知県観光コンベンション協会)

の人々に思い出されるような仕事をしなければ長生きをした甲斐がない」というものであった。いまもなお兼山の業績が記憶されていることは、その想いのとおりになったということだろう。

しかし、兼山は事業を行なうにあたっては自らの信念を通し、農民には労働力の提供を求め、農民が工夫した換金商品を吸い上げて藩の専売制とし、名産品も統制し、藩の商社化を進めた。これらは商人の既得の利益を取り上げるものでもあり、施政の歲月のあいだに士民の反感が噴出、その辣腕はやがて幕府からも警戒され、事業の完成を待たずに失脚してしまう。リーダーの処世は難しい。

兼山の土木事業

兼山の行なった事業は、原野の開発、新田の開発、河川と港湾の修築、山林の保護育成などで、現在の高知県の山林・美田・港湾・物産のうち兼山治政の成果に源を発しているものは多い。

兼山の新田開発により5,000~7,000haの新田が

開かれた。このほか、綿・煙草・菜種などの特用農作物の栽培、養蜂、葉草の栽培、ハマグリの養殖、捕鯨漁法の改良、郷士の取立て、村役人制の強化、専売制の実施、宇和島藩との国境論争の解決を行った。さらに海南朱子学（南学）を興隆したという功績もある。

兼山が興した土木事業をみてみよう。

土佐は約八割が山林である。

木材は城郭建設のための資材として幕府に献上され、上方に積み出されて藩財政を救った。乱伐防止のため輪伐法が定められ、^{とめやま}留山・留木の制度が敷かれた。

当時、田畑は水利が十分でないために荒れ、生産性が低かった。兼山が最初に手がけたのは、知行所・^{もとやま}長岡郡本山郷の水利開発である。吉野川上流の本山に兼山の本邸があった。

新田開発は藩が「まずやりとげなければならぬ」という開発事業で、そのため河川の改修、^{せき}堰の設置による用水路の建設が行なわれた。本山郷の^{なめかわ}櫛の川・木能津川・行川・森川・相川にそれぞれ堰を設け、堰き止めた水で田畑の灌漑や新田開発、溝を完成させた。

ついで兼山は物部川の水利開発と新田開発に着手し、山田堰（長さ327m、幅10.6m、高さ1.5m、使用松14万本、石材6,672m³）を築造した。物部川流域は流心河床が低いため川の両岸への灌漑が出来ず、そのため農耕地としての生産は乏しかった。そこで堰を設けて水位を高くして分水を容易にしようとしたのである。

兼山は水田をつくるために現在の土佐山田町に堰をつくり、左岸に一つ、右岸に三つの水門を設け、そこから用水路を掘って水を分水する計画を立てた。そのもとになるのが山田堰である。

山田堰は約340年間、香長平野を潤していたが、昭和48年度に上流に合同堰が完成したため、その役目を終わりいまは史跡として一部が保存されている（次頁写真上）。^{ぶようじゆすじ}父養寺井筋、野市井筋も物部川流域の成果である。

兼山は山田堰の施工と並行して^{にとどがわ}仁淀川の水利開発

を進めた。ここも下流の河床が低いため兩岸の土地は水利が悪く不毛であったものを、堰築造と用水路網により灌漑が行なわれた。八田堰、鎌田堰（長さ540m、幅18m、高さ12.6m）、弘岡井筋がある。八田堰では下僚の一木権兵衛が兩岸から縄を川中に張りたわみかたによって水勢を測る「糸流し」という方法がとられた。一木権兵衛は一領具足の出身で土木技術に優れぬちに普請奉行となる。小倉小助・三省父子、江口延光も兼山を助けた人々である。

吉野川筋の宮古野溝、四万十川・中筋川の改修、松田川の河戸堰なども完成した。

このうち、香長平野の新田開発では、その土地を前領主の長曾我部氏の遺臣たちに知行地として与えることを約束し一領具足を郷土に取り立てた。

港湾事業に目を向けると、河口にある岩盤の入江を掘削して、津呂港、手結港などを整備した。これらは現在の掘込港湾の先駆ともいえるもので、技術史上からも価値の高いものである。

津呂港（室戸港ともいわれ、現・室戸市津呂、室戸岬漁港）は、湾口にあたる箇所にアーチ形の堤を設けて太平洋の荒波を締め切り、締め切った湾内を干しあげて底を掘って深くした。36万5,000人、工費1190両で完成した。

手結港（現、香美郡夜須町）（写真下）は津呂港に比べれば工事は容易であったが、漂砂が堆積するため湾口に防砂堤、突堤を設けた。それでも5年に一度は浚渫が必要であった。明治6年（1873）、高知県は改修工事に際して漁船の出入りに邪魔であるという理由から兼山が築いた防砂堤、突堤を縮小した。「後世、もし、これを破壊すれば、港はたちまち埋まってしまうだろう」という兼山の遺訓が守られなかったのである。そのため港としての機能を失い、それが復活したのは大正4年（1915）の県による大改修工事の結果という（『高知県の土木史』）。

宿毛湾入り口の柏島港、浦戸港、室津港の改築にも兼山は関与したといわれる。太平洋の荒波に洗われる土佐において港湾の整備は新田開発と並ぶ重要課題であったのである。

兼山による津呂港、手結港、室津港は海上輸送路



高知県土佐山田町にある山田堰跡。香長平野2,300haに灌漑用として豊富な水を提供していた山田堰も、現在は緑地公園として整備され、町民の憩いの場とされている。

（写真提供：土佐山田町役場）



高知県夜須町にある手結港。日本最初の掘込み港として有名。現在は漁船が係留されている。

（写真提供：（財）高知県観光コンベンション協会）

の拠点として上方や江戸を結び、河村瑞賢による本州一周航路の完成ののちは港湾としての役割がいろいろ重要となった。

兼山の建設思想

兼山は学問の育成指導にも熱心で、江戸幕府の官学となった朱子学に対する南学（海南朱子学）を中興し、農民にもこれを学ばせようとした。土佐の朱子学は南学と呼ばれ、野中兼山、小倉三省、山崎闇斎らのグループが振興の先鞭をつけた。

兼山は勤^{つと}い人で、地域開発の考えを南学にもとめたのである。信念を枉^まげなかったというのもその後^まに南学の思想があったからである。

南学の開発思想を簡単にいえば、「人類の生活は自然に依存して成り立つことを前提としているが、人間は自然の秩序に従いながらもそれを開発することによって自然と調和し、われわれが自然を改良することにこそ人間としての意義がある」というもので、兼山もこれに従ってさまざまな事業を実践したのである。

兼山の「室戸湊記」にこう書かれている。「室戸湊記」は兼山の筆といわれ（異説もあるが）室戸港建設記録というもので碑として建てられたものだが、そこに兼山の自負と「建設思想」が読み取れる。“賢君の其の民を勞する所、其の民を逸する所、皆其の道を得たる也”。これは名君（山内忠義）が領内の建設工事などに領民を動員することは領国発展に寄与することであり、それにより領民の生活が安定・向上することは、すなわち優れた政治である、と読み取れそうだ。この前の文章には、この港が完成したことにより藩民の害を除くばかりでなくこの海洋を利用する他国の人々の船も災を免れ、海は昔からあるが港はいま初めて完成した。水難にあった

ものはどれほどいるかわからないが、これから世の終わるまでこの港のために助かる人もどれほどあるかわからない、という建設賛歌がある。

ただし、この碑は兼山の失脚とともに彼の抵抗勢力により壊された。狭量な人々である。

兼山のあまりにも厳しい政治姿勢は藩内にも敵をつくり、卓越した功績は幕府からも睨まれほぼ30年の執政ののち追放され、まもなく49歳の生涯を土佐山田の幽閉地で終えた。一族は長い歲月、幽囚された。

今日の高知に兼山が行なった遺跡は数多い。49歳の生涯であったが、彼の「後世のひとびとに思い出されるような仕事をしたい」という熱い想いは事実となり、現代に根づいている。

（追記）

来年のNHK大河ドラマは司馬遼太郎の山内一豊が主人公の物語という。予想される「高知ブーム」の中で、土木家・野中兼山の事蹟も評価されて欲しいものである。

【参考文献】

高知県土木史編纂委員会『高知県土木史』* 高知県建設業協会 1998年

建設省四国地方建設局監修『四国の建設のあゆみ』*

四国建設弘済会 1990年

横川末吉『野中兼山』* 吉川弘文館 1962年（初版）

平尾道雄『野中兼山と其の時代』高知県文教協会 1970年

西内青藍『偉人野中兼山』* 野中兼山祭典事務所 1911年

*は「建設産業図書館」に所蔵されている。